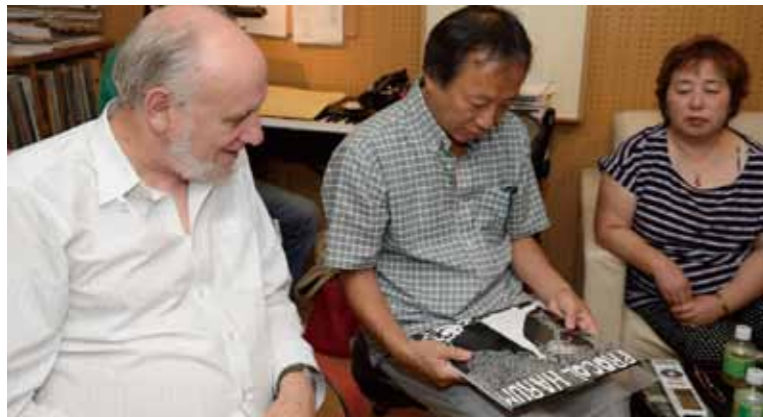


プロコル・ハルム『青い影』は片面1曲だけ収録した12インチ・シングルのテスト盤。パラヴィチーニ氏がリマスター、カッティングを手掛けている



## Tim de Paravicini ティム・デ・パラヴィチーニ

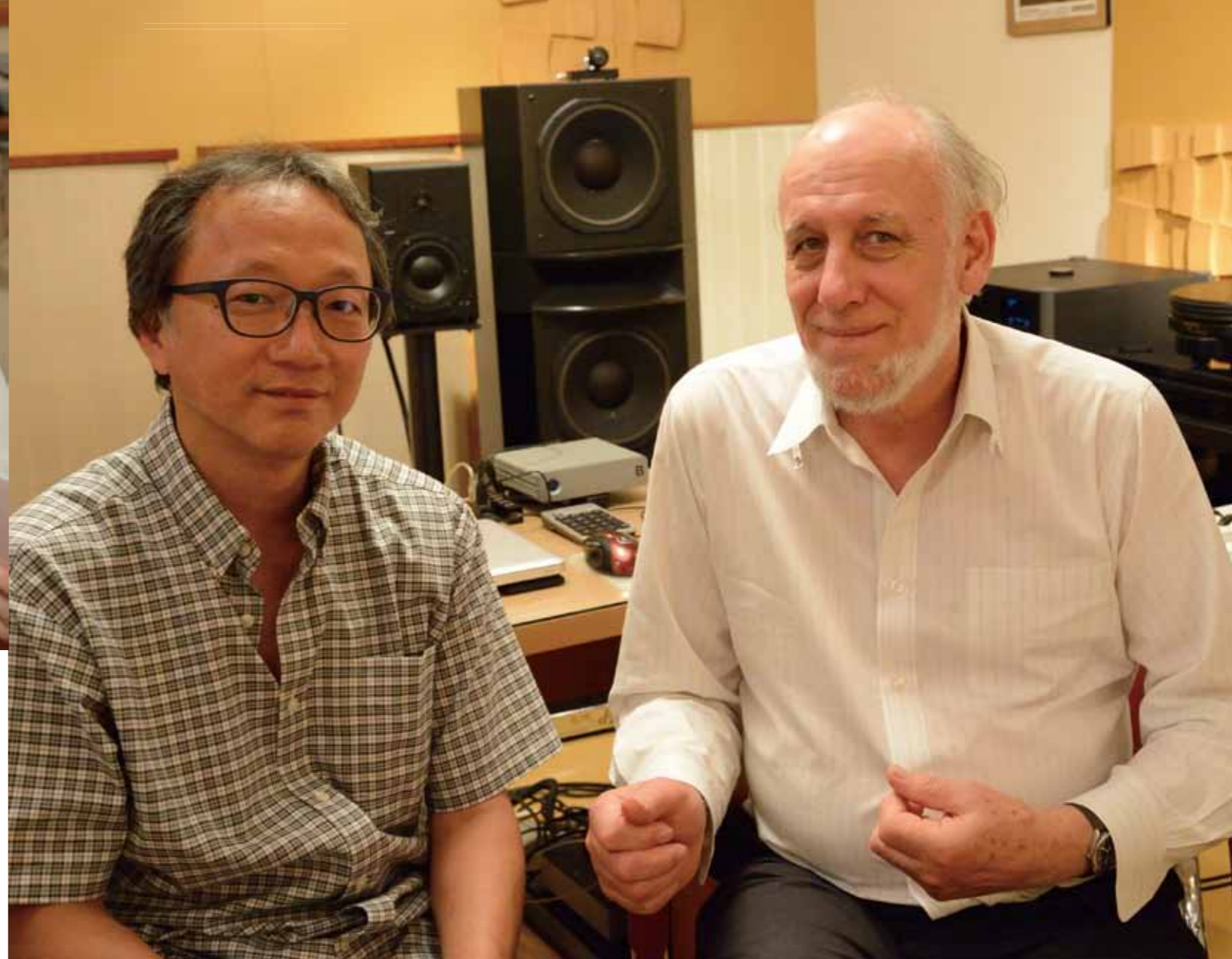
1945年、英国人両親のもとアフリカ・ナイジェリアで生まれる。1965年、英国にてロックバンド用機材のカスタムデザイン、スタジオ機器のモディファイに着手。日本のLUXでのオーディオデザイナー等を経て、1978年にEsoteric Audio Research (EAR社)を設立。音楽制作の面でも1985年に新型レコードカッティングシステムを発表し、1993年にはライヴ・クワター・オブ・ザ・リバーのアルバム『A Meeting by the River』が、グラミー賞のベストワールドミュージック賞を受賞し、自身も技術貢献者として表彰される。以後、数々のアナログ作成、マスタリング、コンサルティング、EAR製品デザインを手がけ今日に至る

## 笹路正徳 Masanori Sasaji

東京都出身1955年生まれ。1977年「鈴木勲グループ」に参加し、JAZZピアニストとしてプロ活動をスタート。プレイヤーとしての地位を確立する一方で、アレンジャー・プロデューサーとしての活動。「阿川泰子」「ラウドネス」「プリンセス」「ユニコーン」「スピッツ」「コブクロ」「小沼ようすけ」「上妻宏光」「南佳孝」「HY」「森山直太郎」「ベッキー」等、「つじあやの」「平賀マリカ」「熊木杏里」「ゴスペラーズ」「中村中」「ジャンク・フジヤマ」等、数多くのアーティストを手掛けている。2007年から2008年は森山直太郎の全国ツアーの音楽監督を担当。その他、音楽番組のアレンジも手掛けるなど幅広い活動を展開中



笹路さんがアレンジャー、ピアニストとして参加している、マリーンの『デジャヴー』(1983年作品)を手にするパラヴィチーニ氏



### 今回試聴したEAR社の製品



**フォノコライザー EAR 88PB** ¥723,450  
プロ専用再生機「EAR 912」の超高品位なフォノステージを独立させ、管球式フォノコライザーの最高級機として設計されたモデル



**プリアンプ EAR 912** ¥2,079,000  
進化を続けてきたオリジナルのスペシャル回路「真空管-トランスカップリング」をふんだんに採用した最高級のプロ仕様モデル



**モノラルパワーアンプ EAR 509II** ¥1,878,450(ペア)  
1978年にパラヴィチーニ氏がEARを設立して以来、「ブランドの顔」であり続けているプロフェッショナル仕様 100Wモノブロックアンプ

●EAR製品の取り扱い：ヨシノトレーディング

「録音状況がすごくよくわかった。80年代はオンマイクの時代だけど、エンジニアがオフ気味をチャレンジしていることとか、良くなかったと反省していたヴィオラ

### ●プリ「912」「パワー」「509II」 当時の録音状況がよくわかる シナトラのサウンドも絶品

次はプリアンプの912とパワーアンプ509IIを一挙に導入。再度「デジャヴー」を聴いてみる。「あまりグレードアップしてしまつと元に戻すのがこわいので聴きたくない気がする」と笹路さんはおそるおそるという表情をしていた。しかし音楽が始まると一転して、うなずいたり、のけぞったり、リズムの要所でバシッと膝を叩いたり、ストリングが入るところで指を差したりとじっとしていない。

「録音状況がすごくよくわかった。80年代はオンマイクの時代だけど、エンジニアがオフ気味をチャレンジしていることとか、良くなかったと反省していたヴィオラ

### ●「青い影」は抜群のセバレーション 音楽がやさしく、前に出てくる

一本を目視できるかのように幅が広い。その音について笹路さんのコメントは的確だった。「この曲は中学生ぐらいから聴いているから、よく憶えていますよ。オルガンはすごく低いところまで出ているし、ベースとドラムが同じチャンネルだから、ぐちゃぐちゃになりがちなんだけど、ティムさんによって整理されてワイドになったことがわかる」

# 笹路正徳 × パラヴィチーニ

## EAR製品でアナログサウンドを堪能する

姉妹誌『季刊・オーディオ アクセサリー』に「笹路正徳がゆく〜オーディオ交友録」というページがあるが、「ゆく」ではなく「迎える」という企画がにわかには持ち上がった。その趣旨は、EARの総帥ティム・デ・パラヴィチーニ氏がこの夏に来日した折り、EAR製品を笹路さんの自宅で一緒に聴きましようというものだ。これは決してムチャな押し掛けではなく、笹路さんはサブシステムでプリメインの859、メインシステムではフォノコライザーの834Pを使っていることに関係しているのだ。

●レポート：  
田中伊佐資  
Isashi Tanaka

Photo by 君嶋寛慶

まずは現状の音を聴いてみる。レコードは笹路さんに選んでもらってマリーンの『デジャヴー』である。自身がアレンジャー、ピアニストとして参加して「83年の録音にはいける音質」ということだ。

B面1曲目のタイトル曲を聴いたティムさんは「サウンドはナイスだ。これはアイザック・ヘイズの曲だね」と音楽通ぶりを示し、初めて聴くマリーンに対して興味深そうにしていた。

ここからフォノコライザーを上級モデルの88PBに替えてみた。この音について笹路さんは「いい意味で柔らかくなってアタックがある。音楽がやさしく、しかし前に出て来る。これは素晴らしい」と感服した模様。ティムさんも「スムーズになったね」と目を細めてから「持参したレコードもぜひ聴いてください」とプロコル・ハルムの『青い影』を取り出した。

これはクラシック・レコーズ社の片面1曲だけ収録した12インチ・シングルのテスト盤でパラヴィチーニ氏がリマスター、カッティングを手がけている。溝は一本